

○司会

はい。では時間となりましたので、これから総合討論、質疑応答という形でセッションを進めさせていただきます。引き続き私浅野のほうモデレータということで進めたいと思います。では、各セッションのあとに、質疑応答の時間なども若干取らせていただきましたけれども、いま一度振り返っていただきまして、もし質問あるいは確認事項などありましたら、まず最初にお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。皆さんの素朴な疑問でも、あるいはコメント、または場合によっては、ご自身の大学でお困りになられているようなことでも結構ですので、何なりとお寄せいただければと思いますが、いかがでしょうか。

よろしいですか。では皆さん少しお考えいただいている間に、いくつか我々のほうで事前に準備させていただいた部分もございますので、総合討論という形で論点をお示しして進めていきたいというふうに思います。もし途中で皆さんの質問、あるいはコメントなどありましたら、ぜひいただければというふうに思います。まず午前中に、基盤力テストということで、山形大学の取り組みをご説明をさせていただきました。本来であれば、本学の理事がここに同席する予定でしたが、所要のために先に失礼させていただきましたところもございますので、実際に設計に携わってこられた千代先生から、いま一度、基盤力テストの構想の背景と経緯などについて少し補足いただけると、特に午後からご参加いただいた方に、少しなりとも情報提供できるのではないかと思いますので、まず千代先生からお願いできますでしょうか。

○千代教授

はい。ご紹介いただきました千代です。基盤力テストのもともとの構想の最初の部分というのは、これまでの山形大学では、授業改善アンケートと称して、各授業について学生からアンケートを取っておりました。これも先ほどのお話の中にあつた学生満足度の部分も少し入っているかと思います。ただですね、この十何年取ってきた上で、かなり数字が5点満点で4.5というのばかりになってくる。もしくは教育の内容で、例えば部屋が良くなかったとか、先生の声が良くなかったとか、そういうふうな、板書が見えにくかったとか、そういう部分がかかり減ってきてまして、教育の内容を改善していくという部分に関しては、学生の感想というのは必ずしも適切ではないというか、教員の間でも、単位を簡単にあげる先生のほうが人気があるのではないかとか、もしくは学生にとって分かりやすいけれども、それほどハードじゃない授業のほうが人気があるのではないかとかというふうな、いろいろご意見もございました。

そういうこともあって、より客観的な形でテストを行うということで、学生の到達度を測ってやろうというのが最初でございます。1年生の始め、1年生の終わりですね。1年間の学修成果を測定してやろうというふうに考えたときに、1つはそのやはり理系の科目、もしくは理系の学部のほうが理解を得られやすいということもありまして、まず理系科目中心の構成といたしました。また、コンピテンシーに関しても、なかなか測るのに対して、大学の理解を得て、1700人の学生全員に受けさせることができるテストというのはないと。それぞれ個別のものについて、先ほどありました、PROGやGPSといった形ではあるんですけれども、世界的にデファクトスタンダードでというのはあまりないので、もう少し下の基礎的な部分ということで、科学的にもかなり完成されている5因子性格調査ですかね、ビッグ・ファイブを利用していくという形で、あとで必要に応じて因子を合わせていけば、多少ずっと使えるものになるかなというふうなことで実施してきました。

もう1つですね、先ほども山下先生からご指摘ありましたが、やはり短い時間でやらないといけないということもあったので、さっき安田さんがちょっと話していました、30分ぐらいでテストを完成するようなものということだったので、あのような形で実施するというのが、2年半、3年前ですかね。決めていたというふうなことになっています。ですので、割といくつかのポイントはありますが、1つは今までの間接調査の限界があったと。なので、間接調査は続けているんですけども、限界を超えている。もう1つは、実施可能性を高めていって、全学の理解を得ていく。この2点が大きなところになるかなと思います。

○司会

ありがとうございます。では、次に学問基盤力の部分について、安田先生に少し深掘りしていただきたいのですが、まずは項目反応理論ということで、1つの特徴になっているというふうに思います。先ほど千代先生のお話で、時間の制約であるとか、あるいはその学生にあった能力値を測定するという意味での項目反応理論がございしますが、複数あるモデルの中から今回、ラッシュでしたっけ、導入されたということでありましたので、その経緯とそれが多分、分析を見越してのことなのか、あるいはそれを採択したことによって、分析にいろんな問題を生じるといったことも生じますが、実際に担当された立場から、なぜそういったことを選択し、それを選択したことによってどういう分析が、ほかに比べてできるようになったのかということについて、もし何かあればお伺いしたいと思いますので、よろしくお願いします。

○安田准教授

はい。項目反応理論についてのご質問ありがとうございます。項目反応理論については、少しテクニカルな内容になるということで、こちらからのご説明を若干省いたところはあるんですけども、項目反応理論にはいくつかモデルがありまして、ラッシュモデルというのは、その中でも最も単純なモデルとされます。なぜそのラッシュモデルを採用したのかという、この理由なんですけれども、それは実はもう一点に尽きるところがございまして。事前テストの調査人数ですね。2016年の12月に1年生を対象に事前の調査を行ったわけなんですけれども、そのとき、調査に協力していただいた学生さんの数というのがおよそ60名程度と。項目反応理論にはそのモデルによって必要とする事前試験の受験者数について、おおよその見積りがございまして、その基準に従いますと、ラッシュモデルが何とか採用可能なモデルであったということです。

ラッシュモデルを採用するメリットと言いますのは、シンプルなので分析しやすいということがございます。本来でしたら、もう少しいろいろなモデルを使用して、ほかの観点からも分析したいところではあります。それで、その補完の仕方なんですけれども、きょうお昼を一緒にいただきました山下先生からいろいろとご教示をいただき、本試験の中で各設問の難易度の推定の精度を上げるような仕組みを取り入れていきたいと考えております。具体的には、ダミーの設問を本試験の中に混ぜ込むという方法です。来年度の4月からこれを実施し、ゆくゆくは、ラッシュモデルのほかのより高度なモデルを採用できないか検討していきたいと考えております。

○司会

はい。ありがとうございます。いま補足いただいた項目反応理論について、もう1つ皆さんが気にされ

ているのは、それぞれの領域における問題をどうして、それをどういう形で項目反応理論に乗せて出題していているのかというところがあるかと思いますが、もしそこ何か補足などありましたらいただけるとありがたいと思います。

○安田准教授

どんどんテクニカルな質問にいきますね。次にどのような設問を出題するかというのには、実はいくつかのアルゴリズムがありまして、今は情報量が最大というか、測定の誤差がより小さくなるような出題の仕方をしています。そのほかの出題のアルゴリズムもあるんですけども、そこはまだ試していないところがありますので、今後いろいろシミュレーションもしながら、検討していきたいというふうに考えております。

○司会

私の理解ですと、きょうのスライド17あたりをベースに、1年間の教育を受けたという仮定をもとに、学生さんが大体これぐらい答えられるだろうというのを推定して、その推定した値をもとに、設問の内容を設定して、それに基づいて出題していくというふうなうたっていたと理解しています。そこは正しいですか。

出題の重要性について、フロアから先ほど個別にコメントいただいたので、そこをお答えしたほうがいいのかと思ったので補足をおねがいます。要は、いろんな問いがある中で、その問いを1年間の教育課程を受けた学生さんが、恐らく解けるであろうというレベルで推定していると思うんですね。そのレベルに基づいて学生さんに出題していくというときに、先ほどご説明いただいたアルゴリズムというのをどう組み込んでいているのかというご質問だったので、そこをお答えいただければと思った次第です。

○安田准教授

設問プールに採用した設問をどういうふうにして決めたのか、そういうことですかね。はい。これにつきましては、作問に当たったのが、本学の基盤教育企画部の各専門分野の教員4名でございまして、この教員たちは、本学の1年次の教育を担当しております。ですので、本学の1年次の学生さんたちがどのぐらいの知識理解を持っているのかというのを把握しておりますので、その先生方が大体このぐらいの難易度の設問であつたらこの学生が解けるだろうと。これは少し難しいかもしれない、これは少し簡単かもしれないと。そういうふうな直観に基づいて、最初は作問に当たって、それを実際に使用して測定してみたところ、こちらの思惑どおりちょうど良いような設問プールを作ることができたということになります。

○司会

はい。ありがとうございます。少し込み入った話になってしまいましたが、事前にコメントいただいたので、こちらで紹介しました。では、もう1つの分析結果ということで、実践地域基盤力については、藤原先生に報告いただいたところですけども、今回、昨年の結果を含めて、5因子とスタートアップセミナーについて分析をしていただいたところです。今後、ほかの科目との関係とか、そういったところを今いくつかやっていただいて、検討していただいていると思いますけれども、この点について藤原先生の

コメント、何かお考えがあればお伺いしたいと思います。

○藤原教授

はい。今はスタートアップセミナーというある意味特殊なクラスの成績等の分析なんですけれども、当初のプランはGPAを使ってやろうと思っていました。ただですね、山形大学の場合は、成績評価のときに、絶対評価を用いる先生と、相対評価を用いる先生、2種類いらっしゃいまして、つまり成績分布は、正規分布じゃなきゃいけないんだという先生と、あとは設定したラーニング・アウトカムを満たしていれば、別にSが100%でも構わないといった2種類の成績評価がある以上、GPAを使って分析をしても良いものかというような個人的な葛藤はあります。

ただ今回ラッキーでした。ラッキーって言うていいかわかりませんが、この分析をまとめる段階では、全学部の成績が出そろっていませんでした。なので、スタートアップセミナーの結果のみを使ったということなんですけど、今後はGPAの分析もやってみるつもりではいます。ただ、その結果が信用できるかどうかは、見てみないと分からないということなので、はっきりとしたプランは、今のところはないかなという感じもします。

○司会

学内事情ということと、統計を専門とする立場からすると、いろんなものが混在して、ノイズが入っているものを、同じものとして比較していいのかといった、そこのお話だというふうに思います。今後、我々の分析結果の中でそういった発見がありましたら、ぜひ報告していきたいというふうに思います。以上が山大側の情報提供でありまして、会場の皆様にご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

○質問者5

この基盤力テストは、クラスにエンベデッドされていない、クラスの外側でのテストなので、成績評価に関係しないということで、最終的な卒業判定との関係はどういうふうに考えていらっしゃいますか。このテストの結果と卒業、まあこれだけじゃなくて各教育プログラム、最終的にいろんな形でアセスメントされるんでしょうけれども、この基盤力テストとDPとの関係なので、卒業判定とどういうふうに結びついているのかというのをお聞きしたいんですが。

○藤原教授

このテストについて学生に説明する時は、卒業判定や成績には一切影響は無い、と言っています。あくまでもこのテストの目的はアセスメント、教育改善のためですので、卒業判定等には関係ないです。

○司会

基本的には改善と、あと学生さんの自らのリフレクションと言いますか、自ら結果を見ていただいて、顧みて、例えばきょう1つの例としてお示ししましたけど、今はブロンズだけど、1年間の教育を経ると、例えばゴールドに上がって、3年間経るとダイヤモンドに行っていただくというのが、我々としては理想とする形です。これを、スマホでフィードバックをして、学生さんが定点でご自身の状況を振り返っ

ていただくというような、そういう活用を考えているというところになります。

他に質問はございますでしょうか。はい、お願いいたします。

○質問者 6

ちょっと部分的な質問で、安田先生にお願いしたいなと思うんですが、例えば今回のテストで、どんなレベルを持っていけば、基盤があるとかって判断ができるかとか、それからある例えば入学時とか1年次の能力があったときに、それは例えば医学部だったら、何年か後の国家試験には、この科目でシルバー持っておかないと合格確率は下がるぞとか、何かそういうある種絶対効果的な評価をフィードバックしてあげるとか、そんなようなことをお考えになったりはされていますか。

○安田准教授

大変有意義なご質問ありがとうございます。私個人としては、そういった扱い方が可能ではないかと考えております。ただ、まだ段階として、ほかのデータとの関連性の分析がまだできないところまでございまして、ゆくゆくは浅野先生ご提案のように、例えば医学科の学生であれば、どのステージまで達していれば、国家試験の合格率がだいたい大丈夫な確率に達するのかなということも出して、そういった基盤力テストの結果の使い方もできるかというふうに考えております。

○質問者 6

こんなのにも使うメリットの1つは、本当にもう絶対評価的に能力を測定するようなとき、ということは、本学もそうなんですけど、これから18歳人口がどんどん減っていく中で、絶対評価的に入学者の学力を測定していく、見ていくというのは、非常に重要な観点であるかと思っています。本学なんかの場合でも、もしかすると今よりも学力的に低い子らが入学してくるみたいなことを、相対評価のみでは全く関知できないので、今回のその山形大さんの取り組みのような、その絶対評価的な学力の測定というのを、まあ入学時とかにしておくというのはすごく重要なことだと思っていますね。

私からの提案というかご質問なんですが、入学者の能力把握、それからどちらかと言うとエンrollment・マネジメントのような、どこから学生を引っ張ってこようとか、もっとこういう学生を採ろうとかというような、戦略活用みたいなことにも広がってくるのではないかなと思っていますのですが、そのあたりの活用の方向性は、山形大さんとしてどのようにお考えか伺いたいですけれども。

○藤原教授

はい。僕はエンrollment・マネジメント部担当なので、代わりにお答えしますが、アメリカの大学の場合は、入学者の絶対的な学力のレベルを、例えばSATだったりACTだったりという形で把握することができます。ただ、日本の場合は、国立大学の場合でも、センター試験を受けてくる学生、受けてこない学生、と多様です。同じ学部でも、受験科目が違うケースもあります。ですので、IRでは、まずはセンター試験の正答率という、ある一定の指標は作ってはいるのですが、全ての入学生に対する客観的な学力指標は作れていません。

ですので、このような文理全部受けなきゃいけないような、例えば、この θ （シータ）のパラメーターだけでも参考にして、入学後のエンrollment・マネジメントに使えないか、ということは考えてい

ます。数年経ったら、もう少しはっきりとした成果を共有できるかもしれません。ありがとうございます。

○司会

じゃあ和嶋先生のほうから。コメントがありそうなので、お伺いしたいと思います。

○和嶋氏

僕自身は、どちらかというところ、テストを実施したり、AHELOを実施したりというところで気になっているのは、山形大学さんが開発されたこのテストというのを、他大学で使用できる可能性とか、そのときにIRT使っているということは、難易度の設定のときに、山形大学さんの学生さんのサンプルで実施しているということは、それをその他大学に移管したときに、恐らくそのまま使ってもいい大学と、そうではない大学というので、使っていいよと言われたときに、どれぐらいのコストがかかってくるのかというのは変わってくると思うんですけども、できるだけ楽をして直接評価をしたい僕としては、まず1つ今回開発されているようなものを、他大学に展開していく可能性というのがあるのかどうかというのと、もしそれを他大学に移設するときに、どういうコストが想定されるかというのをちょっと聞いてみたいんですけども。お願いします。

○司会

では、千代先生、お願いします。

○千代教授

何か商談の話みたいなんですけれども、山形大学については、国立大学としてはだいたい真ん中か真ん中よりちょっと下ぐらいということと、それからあとただ医学科がありますので、上のほうは優秀な学生さんもそれなりにいらっしゃるということで、その範囲で十分なデータを取れるようなクオリティのテストということで、例として作っていますので、多くの大学、国立大学含めて、僕にとってはそれなりにターゲットとしては悪くないテストが作れているかなと思います。

テスト自体は、先ほど申しあげました内製ですので、内容自体はもちろん、我々のものを使うにしろ、先ほどの安田さんおっしゃっていたような形で、もう一度テストの問題を出していただいて、それを標準化するというのも可能ですから、その中で作るということのは可能ですし、提供することも可能だと思います。いくつかの議論を行いながら、各大学でサンプリングでやっていただくにしろ、全学でやっていただくにしろ、学長からは金を取って多分言われると思うんですけども、まあ何らかの形で共同して研究していくという形では、十分やっていけるのかなと思います。

○司会

1点、補足させていただきますと、和嶋先生の質問にかかわるかは分かりませんが、千代先生、あるいは安田先生が冒頭に話しましたように、このテストというのは、知識量を問うというよりは、持っている知識を応用する力を問うています。そのため、例えば偏差値がすごく高いから、じゃあそれに十分答えられるかといったら、それはまた別の問題もあると思いますので、そこら辺を見ながらということになる

うかと思えます。コストの観点から行きますと、恐らく我々が開発しているものについては、何らかの形で交渉の余地はあると思うんですが、もし5因子性格調査をお使いになられる場合、富山大学の名誉教授でいらっしゃる村上先生に一度お伺いを立てていただかなければなりません。著作権の関係で我々もユーザーとして使わせていただいているという状況です。

もう1つは実施するときに、じゃあその基盤をどうするかということで、我々はスマートフォンアプリを導入しています。ウェブベースでも使えないことはないと思いますが、そこら辺は我々が開発を依頼している業者さんとの交渉になろうと思えます。実際のご希望などもお伺いしながら、個別に対応するというのが今の現実的な路線かなと思えます。したがって、無料でお使いいただけるかもしれませんが、場合によっては実施のための環境によって、個別対応にならざるを得ません。例えば、学生個人を特定するという話になりますと、ユーザ認証の話が関わってきて、それぞれの大学の学生番号と認証のIDパスワードをどうするのかという、そういう細かい調整が必要になってきます。

○川嶋氏

山形大学さんに質問なんですけれども、いいですか。はい。1つは、このAPの中では、アドバイザリーボードが積極的に質保証に関与するということが書かれているんですが、そういうその外部の中の、山形大学さんの取り組みに対しての意見というか、コメントとかというのがあったらお聞きしたいということと、もう1つ例えばポートフォリオを活用するというふうに書かれているんですが、そのテスト以外にポートフォリオを活用する、このあたりの現状はどういうふうになっているのかというこの2点について、お伺いしたいと思います。

○司会

モデレータとしてお答えする立場と、全体総括という関係でお答えしたいと思います。まずアドバイザリーボードに関しましては、基本2つございます。1つは千代先生と一緒にやらせていただいています。基盤教育に対するアドバイザリーボードがあります。こちらは5名という少数ではありますが、保護者の方、それから高校の校長先生、民間企業の人事採用の担当者、自治体関係者(市役所の職員)に入っていて、我々がなぜこういう教育をしているのかということと、昨年新たな試みとして今日ご説明いたしました、スタートアップセミナーにも授業参観していただいて、我々こういう能力を身につけてもらうために、こういう授業をしていて、実際に見ていただいて、さまざまなコメントをいただいています。比較的好意的なコメントが多い反面、ときどきですが、高校生のレベルとか、そういったものをもうちょっとこういうふうに見るべきだとか、あるいはこういった授業を逆に高校でもやりたいとか、あるいは公務員志向の学生さんにはこういう能力を身につけていただきたいという、いろんなリクエストがございますので、それを受けて、我々はどう反映するかというのを考えております。もう1つ、アライアンスネットワークといって、これはキャリア教育担当の松坂先生が中心になって、本学の学生さんを多く採用いただいている企業さんに働きかけて、現在60社だったと記憶しておりますけれども、そのネットワークを通じて、アンケートを昨年から実施させていただいています。そこでは、本学の学生に対する満足度、それから教育に対する改善の要望などをお伺いして、可能な限りそれを取り込んでいくということをやっております。

○川島氏

それはさっき、名前なんて言いましたっけ、ディプロマ・サプリメントっていう理解でいいんですか。

○司会

それも実はいろいろとご相談をしているところです。例えば、TOEIC は就職に生かせるので、それはTOEIC のスコアをこれだけ取りましたということだけでいけるんですが、我々が例えば基盤力テストで、この学生さんブロンズですよという形でお示ししても、それが何を意味するのか、あるいは採用時に、何を学生さんにとってお示しすることができるのかというのは、まだ具体的に詰め切れていません。したがって、ディプロマ・サプリメントという形にどう盛り込むかは、就職活動において、学生さんが使えるものにしたいという思いを持っています。我々が、山形大学で学んだことを証明してあげられるような内容にしないといけないということで、その構成をどうするかというのをいま検討しているところです。

○川島氏

ポートフォリオについては？

○司会

ポートフォリオに関しましては、千代先生とも、あるいは藤原先生といま話していますけれども、特に実践地域基盤力の中で、人間力というのを測定しようとする、5因子のみでは不十分でありますので、本学が売りとしているアクティブ・ラーニング系の科目の情報を組み合わせることができないか検討しているところです。具体的にお話ししますと、「フィールドワークもがみ」といって、実際に現地に出向いて地域の課題を解決するためのプロポーザルを作って、それがどうなったかを定期的に現地に行って見ていくという授業があります。この課題解決型の授業に参加している学生さん、履修している学生さんの特性を数値化して行って、それがその後の成績にどう影響しているのかといったことを見ながらやっていくということを考えております。同じように、国際基盤力についても、TOEIC などの客観的なテストだけに偏ってしまいますと、スコアだけになっちゃいますので、そうではなくて、本学が独自に導入している短期留学、あるいは中長期留学など、これらに参加しているかどうかということや、特定の英語の科目を履修していると伸びにどのような差があるのかなど、学生さんの特性をスコア化して行って、何らかの形で反映できないかというふうに検討している段階です。千代先生、何か補足いただけますか。

○千代教授

ポートフォリオの中のフィールドワークとインターンシップの話なんですけれども、そちら我々がポートフォリオを付けているだけじゃなくて、相手方の地域の担当の講師でお呼びした方であったり、あと企業の担当者の方からのコメントというかですね、ちょっと詳しく診断みたいなものを常にいただいています。学生さん一人一人に対していただいているので、その蓄積は今現在しています。それをどういう形で学生さんに、反映したり見せたりというところがあるかというのは、まだきちんと決まっていなくても、データ自体は過去十数年来ためていますので、これをどういうふうな形で表現していくかということは、ひとつ課題としてあります。

○川島氏

結局、学生さんの反応はどうなんですか。ちょっとアセスメント疲れとかそういうことはないんですか。

○司会

正直お話しすると、山形大学の学生さんだからできている側面はあるかもしれません。非常に真面目で、従順です。我々としては、ガイダンスを利用してやっていますが、学生さんは答え始めると、意外とテスト好きなのか、比較的真面目に答えてくれます。今回、2年生の学生さんについては、ガイダンスに来れない学生さんもいましたが、督促メールを何回か送って、安田先生のスライドにありましたように9割超の回答が得られているということを見ますと、比較的理解は得られているのかなと思います。

一方、我々の責任としては、やはり実施可能性という形で、山下先生からもご提案いただきましたように、むやみやたらに問題を増やすとか、そういったことは避けるべきだと考えております。最低限のもので、なるべく客観的に測れるものを、これからも開発していきたいということでやっておりますので、今のところ、学生さんから特段のクレームは届いていないという状況です。

フロアのほうにお戻ししたいと思います。これまでのコメント、あるいは質問などを踏まえまして、皆さまのほうから追加で質問やコメント、ご意見等ございましたらお伺いしたいと思います。

○質問者7

アセス・カリキュラムのこういうアセスメントというのは、多分アクションにもつながる内容になると思うんですけども、そのとき、例えば山形大学さんの場合、こういったデータを学生にフィードバックするだけでなく、教員ですね、教員が個人としてこのデータをどう解釈して、組織としてどう解釈して、そして何らかの意思決定をするというプロセスが大事だと思うんですが、その辺りはどのようになっているのかをお伺いしたいと思います。

○千代教授

はい。どうもありがとうございます。例えば、今回の学問基盤力テストなんかは分かりやすいんですけど、やはり規定の難易度の、問題の並びを見て、既にこの段階で、この問題は何でできないのかなというのがやはりあつたりします。そういう問題に関しては、フィードバックがかかっている、その担当の、例えば物理だったら物理の先生方、数学の先生方の間で議論していただいて、それに対応するような形で授業の内容を増やしてもらい、もしくは減らしてもらいという形で対応しています。それが毎年毎年、一応FDをやっていますので、その中で改善するという事は、実際に今の段階でも行っています。

○安田准教授

私のほうからも1点補足させていただきたいと思います。昨年度の1年生のテスト結果と、今年度の2年生のテストの結果を、比較分析した結果を踏まえまして、改善のための検討を、担当教員の一部においては実施しているところです。具体的に申し上げますと、配布させていただいた資料29ページなんですけれども、2017年度1年生と2018年2年生、分析結果(化学)ですね。私からの報告で、カリキュラ

ムDにおいて、能力値が著しく伸びたことをご説明させていただきましたが、実は、このカリキュラムJについても、本当はその化学の能力値が伸びてほしいんです。しかし、実際は伸びていないと。ですので、このカリキュラムJについては、来年度の授業で、より初歩的などころから丁寧に教える必要があるだろうと検討しております。

○質問者 7

それは各担当者のほうでの、自発的にね、データはありますと。それは、あとはご自身たちで解釈してくださいというレベルなのか。もう少し解明をして、何らかのアクションプランを立ててくださいとかですね。そのぐらい実施する側としては踏み込むのか。どのぐらいの関与をされているんですか。

○千代教授

我々から積極的に、こういうところを変えてほしいというのはいないんですけれども、言わないんですけれども、やはりテストを作成した本人としては責任があるので、ある程度直していくと。カリキュラムを改善していくというのは、先頭立ってやっていただく立場にいらっしゃるの、そこはやっていただいています。あともう1つ言うと、先ほどの数学の、非常に悪くなったプログラムについては、学部長が驚きになられて、大慌てで検討し直すということだったので、数字のインパクトもかなりありますので、上からの改善も、何か下からの改善も、両方行えるのかなというふうには思っております。

○司会

1点だけ補足させていただきますと、昨年のデータで見ますと、我々各キャンパスにお伺いして、教授会または各学部の執行部に近い先生方がいらっしゃるところに出向いて、今回の結果、分析結果をお示しをして、逆に何でこうなっているのかというご質問などをいただきながら、あるいは分析としてはこういうのを出示していただきたいというご要望をお伺いしつつ、結果をお伝えするというのもやっております。評議会でも結果を共有していますし、これが公的な意義があるのかどうかというのは、若干疑いの余地はありますけれども、本学は評議会が終わったあとに、学長と学部長のフリートークセッションがあります。若干アルコールが入っているようなんですけれども、そういう腹を割って話せるときに、クリティカルなデータを出すということを執行部が進めているようです。こういった場において、先ほど千代先生からもお話しありましたように、とある学部長先生がそれを見て、ちょっとうちのカリキュラムには何か問題があるのではないかということ、早速持って帰って検討をいただいているところです。公式・非公式の媒体を通じて、何らかの形でデータをお示ししていくことをしております。ただ、気をつけないといけないのは、そのデータだけお渡しすると、解釈だけが先行してしまいますので、可能な限り我々が出向いて行って、分析結果をしっかりと説明し、フィードバックをいただいて、お互いが納得する形でその数字を解釈するというのを、これからも徹底していったほうがいいかなというのは、個人的には考えています。お答えになっているか分かりませんが、そういう状態にあります。

○質問者 7

まさにそこが聞きたいところで、データがあっただけでは多分動かないので、そのあとの消化だとかアクションに移すために、どんなことをやっているのかちょっとお聞きしたかったというところでござ

いました。ありがとうございます。

○司会

はい。どうもありがとうございます。ほかご質問なりコメントなりございましたらお伺いしたいと。じゃあこちら。前のほうお願いいたします。

○質問者 8

さきほどのご質問にからむんですけれども、例えばコンピテンシーのところを直接評価したときに、それはここで言う、アセスメントで使うのか、エバリュエーションで使うのかという、両方使えると思うんですけれども、それ山形大学さんの話ですと、どちらかと言うとアセスメントという、こういう傾向がある人たちにこういう介入をしていくことによって、事前にもうちょっと精度を高めようという話ですし、さっきの大阪大学さんの場合は、まだこれは試験的なので、どういうふうになるのかは分かりませんが、ちょっとエバリュエーションに近いことを想定されているのかなと思ったんですね。

それをどっちに使えるかという話ではなくて、両方使えるときに、学習者自身とか、あるいは教員とか、あるいは大学の意思決定する層が、どういうバランスでそれを使おうと思っているのかという意思疎通がけっこうできていなかったりすると、非常に誤解を生んだりとか、学習者自身が困惑したりするようなことがあると思うんですけれども、コンピテンシー、評価の測定したものをどう使うのかということ、どういうふうに認識を共通化していくのかということに関して、ご意見とかアドバイスいただければと思います。

○司会

5 因子性格調査に関しましては、正直導入するまでにいろんなご意見がありました。「本当にこれで何が測れるのか」ということから、「こんなテストは嫌いだからやめておけ」みたいな、そういうご意見も正直ございました。我々がいろいろと検討していく中で、少なくとも学長・理事には、現段階で我々がいま調査してきたもので、妥当性があり、なおかつ比較的導入可能なものとしてはこれがありますという形で提案をして、学長・理事はどうしたかという、否定的な学部に対して、「分かりました。であれば、より良い対案があればぜひ持ってきてください。それがもし良いと判断すれば、積極的に取り入れますので、ぜひご提案ください」という形をお願いをし、期限を切って投げたところ、何もなかったもので、結果的にこれが入ってきたということがありま

ただ1つだけ、藤原先生といろいろ議論はしているんですが、どうしても性格調査という言葉が入っていることによる誤解を懸念しています。我々は調査というふうに呼んでいますけれども、場合によっては心理学の先生方からすると、個人情報とか個人の診断という話にもなっていくかれません。これは藤原さんのスライドの中にもありましたが、我々はデータはいただきますが、それで個人の性格を判断するつもりは全くないということを断言していますので、そこで使い分けているということをやっています。最終的には、それを使って自ら学生さんが学ぶ意欲であったり、到達度を上げていただくのが我々の目標になりますので、そこで使っていくというのは、今は徹底せざるを得ないかなという現状です。この点について、もし藤原先生、補足あればお伺いしたいと思います。どうですか。

○藤原教授

ないです。

○質問者 7

午前中のお話、ご質問に答えていただいたときも、逆に言うと、実行している側はそういうふうに乗ってこれをやっているということです。学生も大体それは共有できている。つまりこれは、別に自分の性格を判定されて、自分をそのまま評価されるというよりも、それを見て学修機会、提供機会、提供のされ方が変わるとか、ちょっとシグナルやアドバイスがもらえるとか、そういうために使われているんだということを、学生も思っているし、それから他学部の先生とかもそういうものとして使うということはちゃんと理解をされているという。

○司会

全教員がそこまで理解されているかというのは、若干疑いの余地はありますけれども、ここ2年やってきて、特段、やめるべきだとか、そういうご意見にはなっていません。1つだけ懸念事項としてあるのは、個人情報との兼ね合いの関係で、これをしっかり管理をして扱っていかないといけないということです。学生さんは、ガイダンスのときに、かなり近接して受けていますので、実は終わると「ほら自分こうだったよ」と見せたりしています。おそらくそれほど気にしないんだとは思いますが、我々としては、現状の仕組みの中で、これをしっかり使っていくということを検討しているという状況になります。

○質問者 7

ありがとうございます。

○司会

もう1～2問お受けできそうですが、いかがでしょうか。はい、ではお願いいたします。

○質問者 8

大変初歩的な質問で申し訳ないんですが、この基盤力テストの分析の表で、カリキュラムとあったんですけど、その何でしょう、カリキュラムというと、複数の授業を組み合わせることではないかと思ったんですけど、何かシラバスとかがあるので、もしかしたら普通の授業なんですか。

○司会

こちら、例えばですけど、先ほどご紹介ありました、スライド29でいきますと、AからJとありますが、これは授業ではなくて、それぞれのプログラムです。基盤力テストに関しましては、これは学生さんに答える形になりますので、スマートフォンにログインすると、その学生さんに答えていただきたいテストというのはすべてセットされています。文系の学生さんですと1つ、理系の学生さんですと5領域、そういう形になります。

○質問者 8

どのカリキュラムを取った人も、例えば理系であれば、5つですかね。これを全部受けると。

○司会

という形になります。文系が1教科、実践基盤力を合わせますと2つですけれども、理系の学生さんは5つという形になると。

○質問者 8

被験者がカリキュラムごとに違っているのか。

○安田准教授

このカリキュラムのAからJというのは、匿名化しているものです。

○質問者 8

分かりました。ありがとうございます。

○司会

あと1問くらいはお受けできそうがいかがでしょうか。

○質問者 9

よろしいですか。必ず質問出るとは思いますが、補助金などはどうされるというのは、もう大学として決定されているんですか。この取り組みも含めてですけれども。

○千代教授

お金については、やれる部分については、学内措置で続けられると思いますので、特に今後、大きなお金かかるというのをごさいませんので、多分最初のスタートアップとしていただいたということで、続けていくというのは、学内では了承事項になっております。

○司会

はい。そろそろ時間もせまってきましたので、そろそろ終了したいと思いますけれども、その前に1点お願いがございます。本日の配布資料に、冒頭をお願いいたしましたように、今回ウェブアンケートとして、QRコード、またはパソコンでアクセスいただけるURLを準備させていただいております。エビデンス・ベースではありませんが、我々の次回以降の企画立案の参考になりますので、スマートフォンまたはパソコンから、この残りの時間に回答をいただきまして、ここで終了したいというふうに考えております。

現在4時27分ですので、あと3分ほど時間を残しておりますので、会場でお答えいただけましたら幸いです。皆さま方もご経験あると思いますが、授業で「学生さん、あとで答えてくださいね」と言ってもほとんど答えていただけないので、皆さんにも同じことをお願いする次第です。2～3分お待ちいたしますので、ぜひ回答をお願いいたします。アンケートは、7問と非常にコンパクトに作っており

ますので、すぐにお答えいただけたらと思います。恐らく1～2分でお答えできる内容だと思いますので、少しだけお時間を取らせていただきたいと思います。

アンケートをご記入いただきながらお聞きいただければと思いますけれども、受付に本日の資料がございます。台風の影響もありまして、資料を多めに準備しておりましたが、ご参加いただけない方もいらっしゃいましたので、もし資料を追加ご希望でしたら、ぜひお持ち帰りいただければと思います。後日、山形大学のホームページにも一部修正したものを公開致しますが、紙のほうが良いという場合もございますので、ぜひ受付のほうからご自由に取ってお持ち帰りください。

今回、直接評価による教育の質保証強化による実践ということで、お話をさせていただきました。独自開発のものと、外部のものを持ってきてということですが、非常に我々の時間と能力をかけて、これまで開発してやってまいりました。本日の結果については、学長から「結局、当たり前のことを当たり前前のデータで示したんだよね」というふうに言われたように、学修成果の可視化というのは、そういうことなんだろうというふうに思います。

何か劇的な発見があるわけではなくて、我々が日常行っている大学教育がどうなっているのかというのを、1つの指標あるいは客観的な数字で示すという取組にすぎません。少なくとも我々の中で、千代先生はじめ我々スタッフで言うておりますのは、大学で教育しない能力はやっぱり伸びないということだろうと思います。教育すると伸びるというのは、数値で確認できるようになってきましたので、まずはその一歩を我々は踏み出せたというのは大きいのかなと思います。

このことは社会で言われている、当たり前のことかもしれませんが、それを実際のデータで裏づけるというのが、今回1年間の教育効果の測定という意味では、到達できたのかなというふうに思います。次は3年生を対象にやる、専門の部分も入ってくると少し違ったことが見えてくるかもしれません。また、卒業生や就職先など外部からの評価というのも恐らく入ってきますので、もう少し違った側面も見えてくるかと思いますが、現状、我々ができているのはそこまでという形で、今回、話題提供させていただいたところです。

1分ほど終了時間を超過してしまいましたが、本日のシンポジウム、そして総合討論、質疑応答を、ここで終了とさせていただきます。皆さま、本日は台風の影響により、会場にお越しいただくまで、いろいろご心配をおかけし、かつ一部の皆さまは、お足元の悪い中お越しいただいたと思います。主催者を代表致しまして、心より御礼を申し上げますとともに、会場をご提供いただきました、大阪大学さまに感謝の意を表して、ここで終了したいと思います。どうも皆さまありがとうございました。